



小さくても美しい家——第二十一回

茶室の家

増田英樹邸
(東京都葛飾区)

小さな街角の土地に、小さな家を建てるとなると、狭いからということで我慢しなくてはならないことがある。でもどうしても、こんな風に生きたいと思うと、それが実現できる。思いは通じるし、形にもなる。問題は建てる人の思い。それを見事に形にしたのが、この家と言っているのだろうか。暮らしたとは思いがあつてのこと。上ノ少し閉鎖的に見えるかもしれないけれど、棧の打つてある塀、右手、正面に立つと内側の庭が見える。小さな鉢が並びはじめているのも下町らしい配慮。下ノ食事室と名付けられたリビングの掘り炬燵に並んでもらった増田さんご夫妻。



撮影：小暮徹
文・取材：中原洋

茶室があつて、坪庭があつて、 夫婦の暮らしが楽しめる17坪

場所は葛飾。そう聞いただけで下町、と思う。嬉しくなる。人と人が近い下町の暮らしを思い浮かべることができるから。寅さんもいいけれど、もう少し違う暮らしも下町にはあるし……。この家は隅田川を言問橋で渡って荒川を四ツ木橋で渡った辺り。近くには京成立石駅、お花茶屋なんて駅もある。なんで下町だけがこんな昔ながらの名前を残しておけたのか。

この家、町の四つ角に位置している。造りは地味。土色のモルタルの壁。その前に棧が打つてある。モダン和風の匂いがする。大きな窓はないし、静かな家だ。でも、中に入ると、この家が外に対して、けっしてクローズドな家ではないことが分かってくる。

土地は17坪。幸いに角地だから10%余計に土地が使える。6割が7割使える。土地が小さいだけにこの1割は大きい。

玄関から庭が見え 家の奥行きを感じさせる

奥さんはこの土地で育った。もちろん、伺いもしなかったけれど、よそで暮らそうとはきつと思われたこともないだろうと思う。勝手に。この小さな土地に、好きなご自分の好みに合わせたこの家を建てられているからだ。

じつを言うとこの家の図面を見たときは良く分からなかったことがいくつもあった。玄関の仕掛けだ。なにしろ入ると直ぐに食事室と書かれた部屋に出るからだ。もう、ほとんど玄関がないのではと思えるほどの距離しかない。

でも、ご安心を。図面に表から寄り付きと書かれたところに立って玄関の扉を開ける。そこで目に入ってくるのは庭。表から見る限り小さい家のはずなのに、と思う。この庭が、この家を一遍に奥行き深いものに感じさせてくれる。ここに立って話しているかぎり、訪れた人に内部の空間は見えない。視線が上手に遮られている。目に入るのは、小さいけれど庭。日本の住まいの仕掛けが、この空間に満ちているといってもいい。この家の建築的素晴らしさはここに集約されている。これだけで、この小さな土地に建つ家の奥行きを深さを感じさせることができるからだ。

玄関入って左に曲がる。足元には大谷石が敷いてある。昔懐かしい感触。上がり框は縁側といってもいいスタイル。

そこは板の間。この空間は玄関口であり、この家の奥座敷であり、茶の間でもある。外からは2枚の壁で隔てられているから、内部としての保護感是十分にある。



右/2階のテラスから覗いた中庭。棧の向こうに通りが見える。飛び石は茶室のにじり口への踏み石でもある。
上/表の通りからちよつと引つ込んだ、寄り付きと名付けられたところから玄関扉を開けたところ。中庭がまず見える。この家の奥行きが感じられて、この仕掛けはすばらしい。左手の食事室がすぐに目に入らない仕掛けでもある。エントランスに敷かれた石は近頃珍しい大谷石。足の感触がいい。



上ノ庭先から室内を見たところ。左手には玄関が見える。右手手前の棚はこちらサイドに開く。靴入れでもあり、傘もここに仕舞われていると思う。多分、傘は見せたくないという心だろう。庭サイドにはガラス戸と布を張った扉。折って左右に寄せることもできるようになっていて。下の写真2枚は、掘り炬燵を出したところと、収納したところ。こうすることで、小さな家の空間をシチュエーションによってさまざまに使い分けられるようにした。お茶事の場合は掘り炬燵をしまって待合になる。時間差で一つの部屋が二つに使えることが、いってみれば建築的な仕掛けの一つといえるだろう。



ここに掘り炬燵がある。埋め込み可能な掘り炬燵。埋めてしまえばフラットな一部屋。炬燵に座って庭を眺めると気づく。庭の先に棧を通して表の通りが見える。もちろん、外からも中を見ることが出来る。縦に打たれた棧がちよつとした目隠しになっているけれど、丁度、撮影中に「近所の方ではなさそうな、通りがかりの人が、内部の人影に気づいて「あら、こんな所に庭が」といって覗き込んでいった。きつと夜になれば部屋の明かりが洩れ、暮らしの雰囲気、人の気配が洩れて、ちよつとしたコミュニケーションを成り立たせることはできるだろう。

茶室にこだわったから 茶室ができた

玄関を入ったところのリビングは素晴らしい空間だけれど、でも、17坪の土地に建つ家なら、本当はもつとたつぷりとした贅沢な一室をつくることは難しくなかったはずだ。しかし、それがこうなっているのは、この家の住み手、増田さんご夫妻が茶室にこだわったから。家を建てるにあたってご主人は、奥さんに、建築家を紹介して「好きにしなさい」と言われたという。と、言うことはお茶会ができる家。奥さんの趣味がお茶だからだ。

こだわりは家を建てるにあたっての基本だといえると思う。こだわりが家を個人的なものにする。そしてそれこそが建築家に依頼する意味かもしれない。

でも、お茶会ができる家となるとこれは大変、と誰だっと思う。この広さのなかに庭、茶室、寄り付き、待合、水屋その他。誰だっと思いつかべるのは利休の茶の世界。でも、お茶は遊び。基本さえしつかりしていれば、さまざまに楽しむことが出来ると。そういう閃きがここにはある。

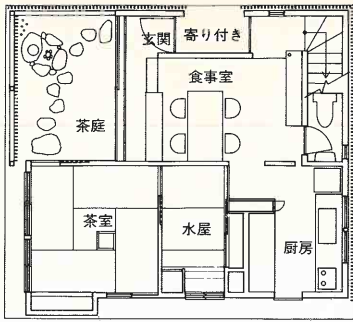
で、この家はちゃんとお茶事ができるようにつくられた。そのところが凄い。

玄関回りが寄りつきとなり、テーブルが埋められたリビングは待合になり、庭の石を踏んで客は茶室に入ることができる。茶室、水屋は正式につくられている。突き上げ天井もある。天井高1.9メートル。座るとこの天井の低さが心地よい。畳は京間の四畳平。お茶がお好きな方はじっくりと一階の平面図と写真を見てほしい。

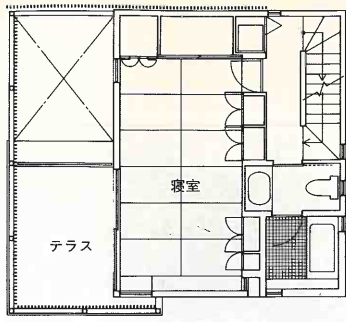
ここにあるのは何億円と掛かった茶室ではないけれど——いや、むしろ当たり前の家を建てる費用で建てられたものだけれど——見事にお茶が楽しめる空間になっている。利休だって、土地の材料、平凡な材料で茶室をつくった。それがいつの間にか高価な材料になってしまっている。お茶は元来、お客さんを招く心はず。約束ごとを踏まえてお茶を点てる人とお客さんがあれば、お茶は楽しめる。

庭と食事室の間にはガラス戸と布を張った建具が入っている。視線を調節するため。布はフィリピンのもので、ヒヌブクアパカという物だそう。一見、芭蕉布のようにも見える。建築家の目が発見した布。「本来、茶室はすぐには見せないものだから」と建築家の小川広次さんの話。

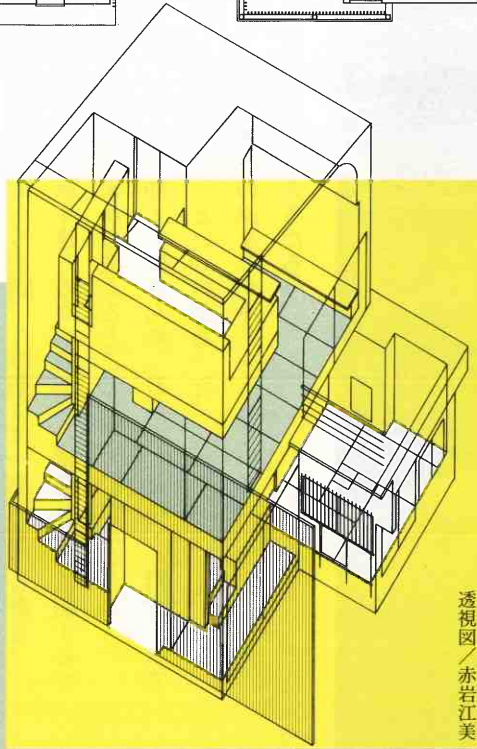
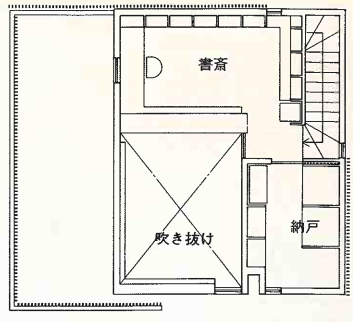
1F



2F

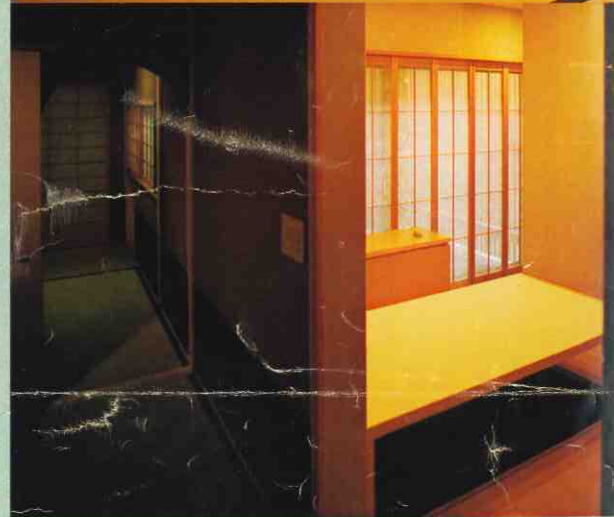


3F



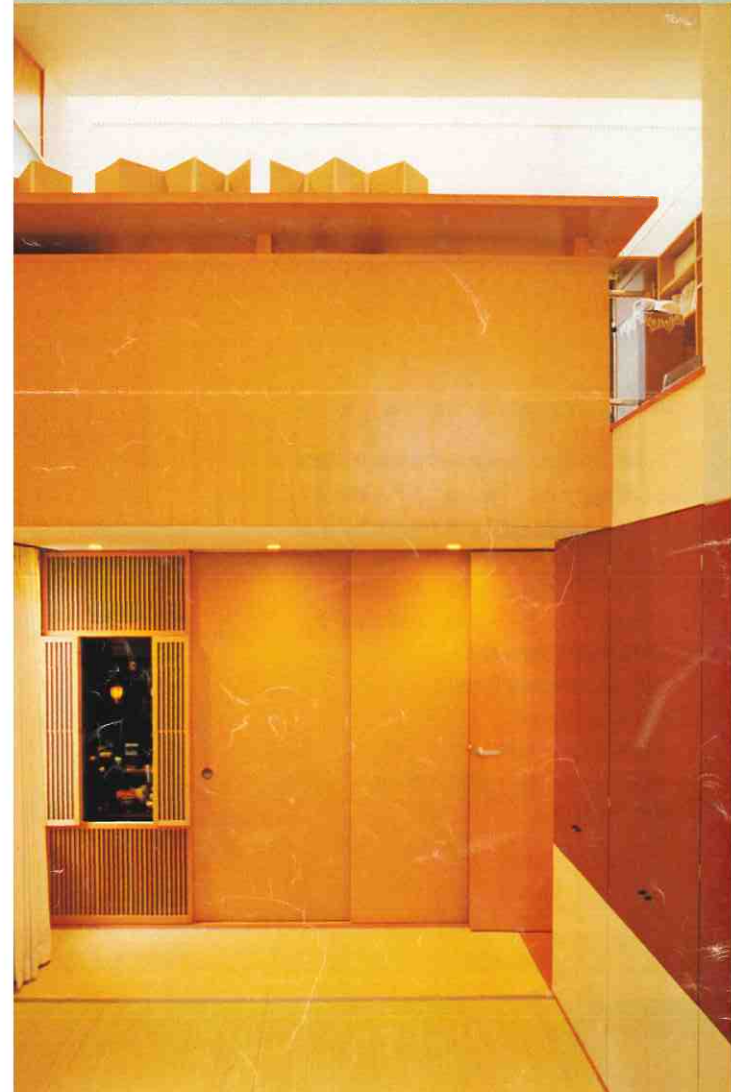
透視図／赤岩江美

1階の図面はなんとも楽しい。家の中をぐるりと回る仕掛け。これがこの家の本質的に日本的な建築の仕掛けだといつていいだろう。図面では読み取りにくいかもしれないが、1・2階の2つの部屋は2通りに使える。それがこの図面の中に仕掛けられていることの面白さだろう。図面を見ながら、家の中を頭の中でめぐると楽しい。



右ページ上／茶室正面。決まりを守った茶室がつくられている。上・上／水屋、食事室と茶室との間に用意されている。上・下／左に水屋、茶室が見え、右手に食事室が見えている。その向こうに庭。小さな空間だけれど、お茶の上での人の動線、お茶のしきたりを守って、お茶が十分に楽しめるようになっているところはやっぱり見事といつていいでしょう。もちろん、庭がもっと広かったらよかったですという人もあるかもしれないけれど、形にこだわらぬが、新しい形を探ることが大切と思えばこれは想像以上の創造といえる。

左／2階寝室。天井がうんと高くとられていて、吹き抜けになっている。上の階からはこの和室を見下ろすこともできる。上はご主人の書斎。その天井からは明るく光が落ちてきてすばらしい。お二人だけの暮らしたから、この吹き抜けは上下階に分かれていても互いの気配を十分に感じ取ることができる仕掛けにもなっている。これ大事なことでしょう。



茶室開きの日には沢山の人が見えたという。お客さんにも驚きがたくさんあったはずだ。

2階に主寝室 吹き抜けに書斎

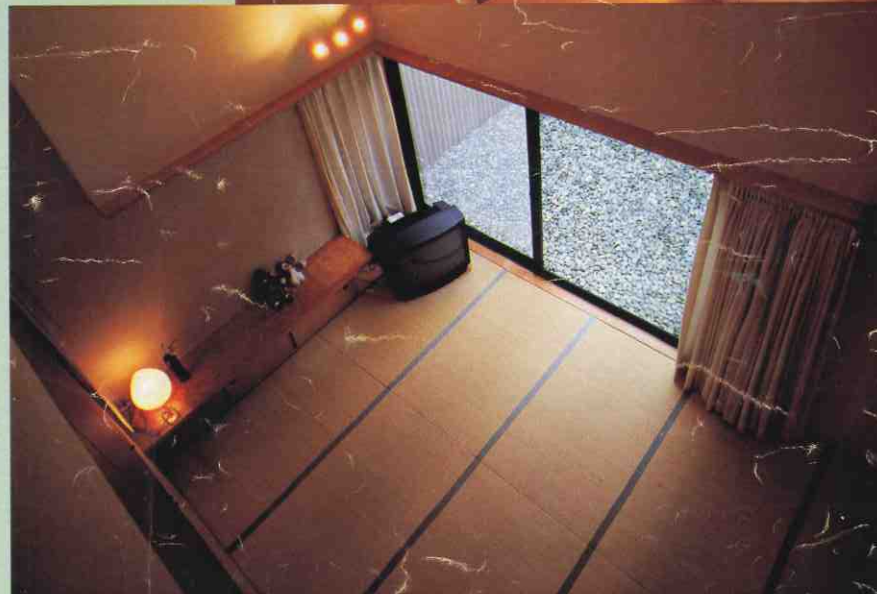
低く組まれた階段は上りやすい。自分が年を取ってくると、そんなことに気づくようになってきた。米松を使ってある。赤みの強い色がいい。足元には明かりが入っている。

2階に上がると畳の部屋。茶室の屋根がテラスになっていて、青い小石が置かれている。この和室には吹き抜けがある。高い天井は舟底天井。天井が上げられたところに、ご主人の書斎が用意されている。ご主人の趣味に広がる空間。この階には一部屋納戸もある。

建築家との出会いはご主人の仕事関係。家を建てるなら最初から建築家には依頼するつもりで雑誌類も良く読んでいらした。「母の家から数えるところの家で3軒目だから」。

ご主人の注文は「茶室、書斎、光と風」。加えて奥さんの「お茶のことは、一階ですべて賄えるように。主人の邪魔をしないように」というのがあった。

「2月には豆まきさせられる。でも、季節の決まりがキチンとしていい」とご主人。そんな伝統的な暮らしを守る格好の家といえるだろう。



上/ご主人の書斎。ぐるり見回すとご主人の趣味の広さが感じられる。上からの明るいい光、舟底天井、変化があつて、しかも小さくて居心地のいい書斎になっている。中上/光が落ちてくる天井のスリット。中下/階段には足元に明かりが用意され、段差が低くしてある。普通より一段多いという。それだけ歩きたい。下/2階、和室の脇にテラス。これは出るためよりは鑑賞用。あるいは空間の広がりを感じるためのもの。青い石にテイストを感じる。ここは主寝室かもしれないけれど、もう一つのリビングと違っていいだろう。何通りにも使えるのが和室のよさでもあるだろう。

小川広次さんのこと

この家は小川さんと元良信彦さんの共同設計として発表されている。お二人とも建築家としては、まだ若い世代に属する人たち。茶室をやるとなるとやはり学んでおかななくてはならないルールがある。緊張もあつたでしょう。「大工もよかった」と言われたが見事です。

小川広次建築設計事務所

〒182 東京都調布市国領町1-7-7

☎0424・82・3027

モトラデザインスタジオ

〒164 東京都中野区中野3-25-10

☎03・3380・7051